

瑞▼滝口恋慕篇▼坂本錦道▼旅順開城▼田戸
杜明▼鉢の木▼長谷川錦舟▼八甲田山▼杉山
旗水▼彰義隊▼清水源城▼川中島▼吟普門義
則▼舞大和田鶴道(九十翁)。外に伊集院牙
城、仲川秀邦、橋本南泉三氏を来賓に迎えて
小宴の後散会した。

梅原旭瀧温習会

四月六日(日)屋東都東山区松原上ル安井神社
金比羅宮会館。後援京都琵琶協会。石童丸▼
梅原旭瀧▼赤垣源蔵▼中谷瀧泉▼衣川▼加藤
旭晃▼安宅の関▼村山旭嬢▼栗津の露▼清水
旭翠▼葉見行▼水内燦水▼柳の精▼山崎旭栄
▼本能寺▼山岡旭清▼小栗栖▼田中歎水▼綱
館▼山崎旭栄▼国友旭香▼五條橋▼牧南水▼
祝電披露▼薩摩の乙女▼会主梅原旭瀧▼井伊
大老▼木下皇水▼那須与市▼国友旭香▼元寇
▼平井香嶺。(印は京都琵琶協会員)

各流派琵琶定例研究会

四月十三日(日)屋東都新宿区新宿洲鳳会館、
主催日本琵琶協会(有料)。那須与市▼筑
前内田旭章▼小栗栖▼錦心流森中志水▼曲垣
平九郎▼錦。都派大場穂苑▼菅公▼薩摩八束
一峰▼噫八甲田山▼錦心流杉山旗水▼小栗栖
▼筑前山下旭瑞▼俊寛▼薩摩鶴派石坂鶴朋▼
異国の丘▼錦心流山田洲鳳▼講評▼金田一春
彦先生。

京都山科醍醐寺修禪に琵琶献奏

四月二十日(日)昼境内の特設舞台上で大阪琵琶
同好会が協賛して数曲献奏。(次号詳報)。

京都琵琶協会四月例会

四月二十九日(木)昼会員梅原旭瀧女史宅。
(次号詳報)。

故伊吹正陽氏一周忌法要

四月十三日(日)昼同氏宅に於て営まれ京都琵
琶協会員数氏が参列冥福を祈った。
(次号詳報)。

ラヂオ琵琶放送

三月二十七日(木)午後三時十分NHK・F.M.
錦心流「重衡」山口速水、薩摩「城山」須田
誠舟両氏放送。

予告

○：各流派琵琶名流演奏会 五月五日(木)十時
一十七時神戸市県庁横兵庫民会館、主催
日本琵琶協会関西支部。(有料)
○：京都琵琶協会五月例会 五月十一日(日)午
後一時、平井春嶺会長宅。
○：各流派琵琶合同演奏会 五月二十五日(日)
十一時一十七時京都市烏丸通り御池京都商
工会議所ホール。京都琵琶協会。一水会京
都支部。薩摩四明会共催。

○：琵琶名流大会 六月十四日(出)正午東京
日本橋東京証券会館ホール、主催日本琵琶
楽協会。(有料)

あ 桜がふくらみ、咲き、そしてアツ
き とうまに散り果てた四月も夢の間
に過ぎ、緑したたるさわやかな五月
(さつき)となった。●物を数えるの
に琵琶は一面、撓は一丁、三味線は一丁とい
うが、世の中には変な数え方が沢山あること
に気づいた。●たとえば琵琶歌は一曲と数える
が謡は一番といふ、鳥でないのに兎は一羽二
羽と呼ぶ。●四本の足があるのに椅子は一脚二
脚、鳥賊(いか)は一杯二杯と数える。●豆腐
はワンパックではなく本当は一丁二丁という
●板は食しないのに蒲鉾(かまぼこ)は一枚
二枚、魚偏でも鯨は頭二頭。●一本のコーラ
空瓶にも一輪の花をさせば花瓶一口となる。●
鏡は一面だが鏡台は一基二基、うどんは一玉
二玉と数えるが料理すればハイ一丁あがり。●
蠟燭は一丁電灯は一灯、紙ならぬ髪をすく
櫛は一枚二枚。●「一ぱいやろわか」も畏こま
ると「一献参ろう」。●蛙は一尺または一雙或
は一尾二尾。●一反の反物も二反続けば一匹
となり、詩は文学的に一首一什一絶一篇一律
一聯。●まだまだ調べたら沢山あると思うが、
今チョット頭に浮かんだものだけでもこれだ
けある。なんと日本語はむづかしいもの。と今
更ながら驚く。●琵琶楽に直接関係のない散文
を弄して恐縮々々。

昭和五十五年五月一日発行(非売品)
編集者 植村 真 水
発行所 高槻市津之江北町一ノ二番
電話〇七二六(七三)六〇五一番

琵琶
機関紙

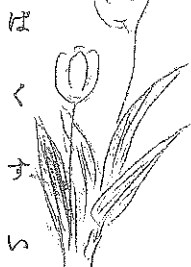
京

結

第三一一号 京 絃 社

建武の中興と

吉野五十七年(一)



後醍醐帝が隠岐へ流され、資朝・俊基・具
行らは殺され、師賢・藤房らは流浪の身とな
って、日本国中興の計画、今は絶望かと思わ
れた時、幸いにして二人の偉大な人物が残っ
ていて、回天の業を成し遂げた。大塔宮護良
親王と楠木正成である。

護良親王は後醍醐天皇の長子であった。元
弘元年には比叡山に在って僧兵を指揮して居
られたが、情勢一変のため山を下り、しばらく
奈良の般若寺に隠れた。賊兵これを聞きつ
け五百余騎を以て寺を包囲したが、宮は大般
若經を入れた唐櫃の中にかくれて難を逃れた。
危い所を助かって、宮は御供を従え熊野に
向われる。一行は柿色の衣に笠をかけて山伏
姿となり、熊野から十津川へ入り、更に吉野
山に登ったが、その間、隠岐に在る天皇にも
河内の楠木正成にも能く連絡をとって全国に
号令された。各地の官軍は大低大塔宮の令旨
によって動いた。然し天下の形勢を察して謀

を立て、且つ幕府の大軍を一手に引き受けて
これを悩まし、幕府勢力恐るるに足らずと人
々を奮起させたのは楠木正成であった。

正成の先祖は橘氏。敏達天皇より出た名門
である。聖武天皇時代の左大臣橘諸兄は有名
だが、いつの頃からか河内に土着し、あまり
世に知られなかった。それを後醍醐天皇は笠
置に召されて、天下を平定する策を尋ねられ
た。正成は「天下草創の功は、武略と智謀と
の二つにて候。もし勢を合せて戦わば、六十
余州の兵を集めて、武蔵相模の兩國に對すと
も勝つこと得難し。若し謀を以て争わば、東
夷の武力只利を摧き、堅を破る内を出でず。
是れ欺くに安うして怖るに足らぬ所なり。
合戦の慣いにて候えば、一旦の勝負をば必ず
しも御覽せらるべからず、正成一人、未だ生
きてありと聞こし召し候はば、聖運遂に開か
るべしと思し召し候へ。」と頼もしげに直答
して河内に帰り、赤坂城を修築して天皇奉迎

の準備をした。

しかし笠置は、意外に早く陥落した。笠置
に向った関東の大軍は、これを知ってそのま
ま赤坂城に攻め入ったが仲々落ちず、却って
寄せ手は敗北するばかり。敵軍は正成の智謀
に驚いて持久戦に持ち込み、食糧攻めとした。
何分にも急の事とて城内には充分の糧食もな
く、やむなく正成は部下とともに風雨の激し
い夜、城に放火し闇に紛れて敵の重圍から脱
出したが、敵軍は正成が自殺したものと思
込み、元弘元年十月こを引上げた。

元弘二年十一月、正成は突然立って赤坂城
に再起し大いに敵をやました。六波羅から
は直ちに援軍を差し向けたが、翌三年正月十
九日午前が始まった戦は終夜まで続き、六波
羅勢は大軍でありながら敗北して京に帰り、
これに代って討手を承った宇都宮公綱も、正
成の智謀には手の施しようもなく、幾人かの
家来が捕虜となり、武勇の名も空しく京に引
き上げた。

正成の根拠地は、金剛山の西千早川の溪谷
で上流には千早城、川は西北に流れて谷を出
る所に赤坂城、これを中心にして前後に連な
る険しい連山、深い谷々、これを自然の城郭
としたものである。而して金剛山は吉野山、
高野山と並び立ち、正成の部下は自由自在に
往来し、それより更に全国に連絡する。

六波羅勢は破れ、強豪を以て鳴る宇都宮勢
又敗走のため、幕府は全国的な規模を以て大
軍を徵発し、これを三軍に分つて三方より楠

木勢に向わせる。第一軍は大手一河内から正面を攻める。大将軍は阿蘇治時、軍奉行は長崎高真、これに属する軍勢は河内・和泉・摂津・美濃・加賀・丹波・淡路の七か国。第二軍は搦手一和から背後を攻める。大将軍大仏高直、戦奉行工藤高景、目付二階堂貞藤、山城・大和・伊賀・丹後・但馬・伯耆・播磨・近江の八か国。第三軍は側面一大将軍名越宗教、軍奉行安東円光入道、尾張・美作・越前・因幡・備前・備中・備後・紀伊・安芸・阿波・伊予の十一か国。

以上三軍に出動した二十六か国に加え、大番として京都の警備に当たっていた關東武士を、第二軍と第三軍に配当した。その第二軍には新田、里見、豊島の各氏が、第三軍には佐賀、江戸、和田、瀬下の諸氏が入っていた。この大軍の出発に際して、幕府は厳しい軍令を下した。それは左の五箇條である。

- 一、合戦は三軍必ず協議して進み、決して抜け懸けしない事。
 - 二、一人負傷して一族退却すれば全軍が崩れるから、負傷しても決して退かない事。
 - 三、物資を掠奪しない事。
 - 四、大塔宮は、従来は捕え奉れの命令であったが、今後は殺害してよろしく、その者には近江麻生の荘を与える。
 - 五、楠木正成を討ち取った者には、丹後船井の荘を与える。
- 三軍並び進んでの攻撃は元弘三年二月二十二日に始められ、吉野山は遂に陥り、大塔宮

は高野山へ移られた。村上義光が宮を名乗って敵を欺むき、御命に代ったのはこの時である。

吉野が陥ったので敵の三大軍は楠木勢に集中して攻めたが正成はよく戦い、赤坂は敵に渡したけれども、千早城は天嶮と正成の智謀に護られて容易に落城しない。これらの事情は「太平記」に詳しく書かれている。

楠木は、元来勇智智謀相兼ねたる者なりければ、此の城を拵へけるはじめ、用水の便を見るに、五所の秘水とて、峯通る山伏の秘して汲む水この峯にあって、滴る事一夜に五石ばかりなり。この水如何なる早にもひるることなければ、形の如く人の口中を潤さん事相違あるまじけれども、合戦の最中は、或は火矢を消さんため、又喉の乾く事繁ければ、此の水ばかりにては不足なるべしとて、大なる木を以て水舟二、三百打たせて、水を港へ置きたり。又数百箇所作りならべたる役所の軒に繩を掛けて、雨降ればあまだれを少しもあまらず舟に受け入れ、舟の底に赤土を沈めて水の柱を損ぜぬやうに拵へける。この水を以て縦令五、六日雨降らずとも、こらへつべし。その中に又などは雨降ることなからんと、了簡しける智慮の程こそ浅からぬ。されば城よりける、あながちに此の谷水を汲まんともせざりけるを、水防ぎける兵共夜毎に機をつめて、今や今やと待ちかけけるが、始めの程こそあれ後には次第次第に心おこたり機

ゆるまつて、此の水をば汲まざりけるぞとて、用心の體少し無沙汰にぞなりける。楠木、これを見すまして、究竟の射手をそろへて二、三百人、夜に紛れて城よりおろし、まだしののめの明けはてぬ霞がくれより押寄せ、水辺に詰めていたる者ども、二十余人斬り伏せて、すきまもなく斬ってかかりける間……。(下略)



五絃閑話 (八)

水藤 五郎

理解と批評 (二)

原島旭莊会に於いて、主催者である師は、後半に「牡丹寺由来」を新曲発表した。この曲は、師が作詞作曲したのだそう、楽屋を訪づれた私に、今日のは自作自演だから、笑わないでちょうだいネ」と大変謙遜した挨拶を述べられた。この日、客席に在って私はこの牡丹寺由来を含めて、数番の演奏に接した。

奏であった。ただ、長時間の会の為か、あの一時間の賑いが客席にはなくなつて、かなりの空席が目立つものであった。この一点が、演奏効果上の弱点になつてしまふ。盛況であつた客席に空席が出来、長い番組に耳が疲れている聴衆に新鮮な感動を与える事は難しく、それが耳馴れぬ新曲であれば尚更である。

今日の会での目当である善のこの曲を、かなりの人が聞くことなく帰つてしまひ、又楽しみに聞こうと席に在る人々の耳にはかなりの疲労感が残つているのが現実であつた。旭莊師の芸風と声柄が、この幻想風で、且つ明るい曲趣には適していたのであつたが、それを更に効果高いものにする善の助奏・伴奏陣が決してその役割を果たし得たとは思えなかつた。その主な原因は、尺八の音色そのものがこの曲には向かなかつたからだと思ふ。牡丹花の精が舞い狂う所で、旭莊師の流麗な絃は活躍するが、ここでもう一つ合奏としての盛り上りを欠く感を抱くのは尺八の持つ「重さ」の為にほかならない。敢えて言えば、「横笛」ではどうであつたかなと思つたりもした。又、この曲の最高潮に位する個所で、旭莊師のみの歌で通した事にも原因があつた。

旭莊師の後継者と云うにふさわしい若い女性弾奏家、藤内旭須美さんを助奏として脇に座らせた以上、師はこの個所を共に歌わせるべきであつたと思ふ。さすれば、花の精に対する聴衆のイメージを充たすことが出来たであらう。若い旭須美さんの声が入ればと思つ

たのは私ばかりではあるまい。旭須美さんの助奏が絃だけであるのなら、むしろ、小絃にして高低の変化を図るべきであつたし、この日、小絃の名人吾妻江風の出演があつたのであるから、江風師の小絃助奏でも加わつていかならば、舞台の効果はいやが上にも高まつたと思ふ。

かつて、昭和四十年に亡母と、故榎本芝水師の掛合いで「頓証善提」がNHKで製作された。これは芸術祭番組の創作邦楽で、平家物語の横笛と滝口入道の恋話が内容であつた。亡母の受け持つ横笛が芝水師の滝口入道の庵を訪れる条で困つた事が起つた。横笛が扉を叩いて「滝口さまあー」と呼びかける口詞があり、そのうら若い女人の声を亡母が出せないものである。出せないと云うのは少し語弊があるが、芝水師との掛合いの関係で、当然調子が低くなつていてもともとも芝水師は男性として、終生高音ではあつたのである。急が亡母としては声を押えられていて、急に細く、且つ高い声が出なかつたのである。その為、只一口詞ではあつたが、今は亡き門人の新部桜水にそれを言わせる事になつた。

もともと声の細い彼女は、亡母より年令も若いこともあつて、その横笛の一声を見事に演じた。この時を思い起して、一層表現力の限界と、それを工夫する必要を感じたのであつた。

支える肉体に変化が生じる事は自明の理であらう。そうであれば、表現力に相異が出て、若い声を出しているつもりでも、やはり低い声になつてゐる。ここを自覚して、写實的効果が要求される時にはそれ相應の工夫を凝らさなければならぬと思ふ。

この日、年令による表現力の問題について考えさせられる演奏がもう一番あつた。それは客演として登場した薩摩琵琶の仲川秀邦師の「白虎隊」の演奏であつた。

琵琶の演奏表現の大きな部分は「崩れ」と「吟替り」に尽きるであらう。それは講談に於ける修羅場同様にその芸能の武器であるが、その一方で演奏技の真を問われる個所でもある。この二つの相反する技法、則ち、動と静と悲を共に極めることは難しい。若い時豪と悲を共に極める故、その勢威で崩れを弾ずる事は出来る。が、吟替りを持って、悲哀を写実することは難しい。私自身、「靱猿」を脅かす太郎冠者の条りは歌えても、猿曳が猿を掻き抱く哀しい個所はどうしても出来ない。下手だからと自避したり、批評されたりすることは手易いと思ふ。そんな事以上に、琵琶の語り備える吟替りを、登場人物の魂の叫びにまで引き上げて表現することは難しい。それは、今の私の芸、それを支える肉体の年令では無理なのであらう。これとは逆に、芸と年令を深めた仲川秀邦師の白虎隊は、「崩れ」の部分が終る迄は、声と弾法の

衰えを見せ乍らも、飯盛山によじ上り：：か
らの語り、師独特の哀調を帯びた節調と、
枯淡を加味した弾法は、流石に芸の深さを思
わせ、聴衆を説得するものであった。よく考
えて見ると、師は六十余年に及ぶ芸歴であっ
た。

(訂正)前号「五絃閑話(六)」は(七)の誤植でした。お詫して訂正します。(係)



曾我物語の伝説を秘める

東海道随一の難所箱根山

辻 旭城

昔の箱根山は江戸の日本橋から、京の三條
に至る東海道筋の随一の難所であった。ここ
を往来する旅人は、どれだけ難渋したことか
幾多の物語が今に伝えられている。

まづ曾我兄弟の物語に入る前に、源頼朝に
触れる必要があると思う。

頼朝は治承四年(一一八〇)、千葉常胤の
献策によって源家旧縁の地鎌倉を本拠とし、
やがて鎌倉幕府を確立して弟範頼、義経に木
曾義仲を討たせ、続いて文治元年(一一八五)
平家が亡び、源氏の政権を確立した。

建久三年(一一九二)征夷大将軍になった
頼朝は、その翌年富士の裾野で大巻狩りを催
した。この大巻狩の真最中に日本三大仇討の

一つ、曾我兄弟の仇討物語が起きた。十郎祐
成、五郎時致兄弟の、十八年前に父の祐泰を
暗殺した工藤祐経を斬り、仇討本懐を果たし
たというものである。

この仇討の話をたれば、領地争いが原
因であった。まだ平家の全盛時代、伊豆の伊
藤は伊東祐経が治めていた。工藤祐経は祐経
の子で、父の死後は当然伊東の領主になれる
わけである。しかしその時祐経は九歳の幼児
であったので、代つて従兄弟(いとこ)の伊
東祐親が治めることになった。

やがて祐経は成人して京にのぼり平重盛に
仕えた。都では祇園や島原で遊女には不自由
しなかつたが、そろそろ慾心が湧いてきて、
伊東の領地が欲しくてたまらない。そこで人
を介して祐親に交渉させたがらちがあかない
ので土地の代官所に訴えた。代官は双方を呼
び吟味の後、結局領地切半という事で落着し
た。しかし代官の捌きに祐親を恨んだ祐経は、
ついに安元年(一一七五)十月十五日、祐
親、祐泰父子が家来の大見小藤太、八幡三郎
らに命じて伊豆を襲わしめたが失敗に終わった。

その後祐経は源氏方に加わり、祐親は平家
方につき、頼朝の石橋山での旗上げに、敵味
方の立場で祐親は祐経によって殺された。
非業の最期をとげた河津三郎祐泰には、一
万、宮王の二人の子があった。その後母満江
(まんこう)は二人を連れ、相模の国曾我城
主曾我太郎祐信に再嫁したので、兄弟は曾我
の姓を名乗ることになった。

一万五歳、宮王三歳の頃、兄弟は伊東祐親
の孫ということで殺されそうになったことも
あった。そのため母満江は、兄一万を元服さ
せて曾我十郎祐成と名乗らせ家をつがせた。
また弟宮王は、亡き父の菩提を弔うため出家
させようと、箱根別当行実頼に頼んで金剛王院
の稚児として、十三才で権現に預けられた。
しかしこれが却つて宮王に父の仇を討つ決意
を固めさせることになった。

文治三年(一一八七)宮王十三歳の正月、
頼朝は和田義盛、島山重忠以下三百五十騎の
行列で箱根権現に参拝した。その中に仇の工
藤祐経が加わっていた。僧侶の教えによって
仇の顔をまのあたりに見た宮王は、復讐の念
が強く湧きあがった。

宮王は十七歳の春、鎌倉の北條時政に頼ん
で元服して曾我五郎時致となり、兄弟一丸と
なつて仇討の機会をねらっていたが、遂に優
曇華の花咲くときが来た。

建久四年五月、富士山麓を舞台に頼朝の大
巻狩が行われ、仇の工藤祐経がその陳屋に居
ることを知った。兄弟は天の助けと喜び、
母に別れを告げて曾我の里を出発した。途中
箱根の山を越えるのであるが、昔の小学校の
歌によって箱根越えの難儀を想像願いたい。

箱根の山は天下の嶮、函谷関も物ならず、
万丈の山千仞の谷、前に鋒え後えに支う、
雲は山をめぐり霧は谷を閉ざす、昼尚暗き
杉並木、羊腸の小径は苔をぬらか、一夫関
に当るや万夫も開くなし、天下に旅する剛

殺の武夫、大刀腰に足駄がけ、八里の岩根
を踏みならず、斯くこそありしか往時の武
士。

歌の通り一般人には近づき憎い所であった。
兄弟は箱根権現に参拝して仇討ちの成就を
祈願した。その後五月二十八日の夜祐経の宿
を襲ふ、首尾よく父のかたきを討ちとつたの
である。



不遇の赤穂義士

萱野三平

郡 惠一

：心得えたりと、腹十文字にかき切つて、
臟腑を擲んでしつかと押す：。廻る舞台は
仮名手本忠臣蔵の六段目、京都府山崎の在所
は与市兵衛の百姓家。その娘おかるが勘平と
所帯をもっているところでもある。

山崎街道から、勘平が鉄砲に簀笠をうちか
け帰宅してみると、おかるが駕籠で「わたし
ゃ売られてゆくわいな」と京の祇園の一字字
屋へ向わんとする寸前。驚いた勘平が事情仔
細を尋ねたところ、自分の武家帰参のため身
売りしたのだという。

そのうち、一文字屋が与市兵衛に渡した半
金・五十両を入れた財布も竊模様だったとわ
かり、さては先刻、自分が猪と間違つて撃ち

殺したのは、いかに闇夜とはいえ、男の与市兵
衛だったのかと思ひ悩む。

そして泣きの涙で別れ行くおかると見送る
勘平：。程なく非義非道の金は受け取れぬ
と、千崎弥五郎と不破数右衛門が現われ、今
は詮なく、血走る眼に無念の涙：。を流しつ
つ腰刀引き抜き、己が腹に突き立てる勘平：。
だが、肩の傷口は鉄砲によるものではなく、
刀疵であったことが判明して彼の無実が明ら
かとなり、金も受取つて仇討連判にも加えら
れて、頭記の浄瑠璃とともに血判を押して、
「哀れ果敢なき：鐘の音に臨終の幕」とはな
るのである。

以上が「与市兵衛内・勘平腹切りの場」で
あり、四段目の判官切腹シーンと相俟つて、
「忠臣蔵」に於ける「重い語り場(重要な場
面)」とされてもいる。

ところで、早野勘平のモデルとして、世の
人々には「萱野三平」なる実在の青年武士を
想起することが出来る。

萱野氏は多田源氏なり、土岐源氏の流れ
を汲むとされ、摂州豊島郡萱野郷(現大阪箕
面市の東部)を領する土豪であったが、戦国
時代には中川清秀に属して茨木侍であった。
そして江戸中期の延宝三年(一六七六)萱野
重利の三男として誕生したのが、重実こと三
平なのである。やがて十三歳の秋、当時の主
君大島義近の紹介で播州赤穂の城主浅野長矩
の中小姓として仕え始めた。しかし元禄十四
年(一七〇一)三月十四日の刃傷事件、江戸

詰めだった三平は、直ちに第一番使者として
国もとの大石へとすつ飛んだのである。

その後、父のすすめる大島家への仕官と、
大石良雄以下の意図する仇討ち問題の板挟み
となり、遂に翌十五年一月十四日早朝、「晴
れ行くや日ころ心の花曇り」との辞世の一句
を残し、二十八歳を一期として果てたのだ
た。

このように、実録と芝居には可成りの相違
が認められるが、当時の民衆にとつてみれば、
三平の悲劇的事実を、勘平という舞台上の人
物に仮託して未永く伝えられたのであろう。



最後の「あっぱれな敵」

丁 汝 昌

佐藤 忠 男

日清戦争(明治二十七年、八年)の海軍の決
戦は、伊藤祐亨提督のひきいる日本艦隊と、
丁汝昌のひきいる清国北洋艦隊との間で行わ
れた黄海海戦であった。この戦いで北洋艦隊
は敗北し、威海衛軍港にひきこもった。日本
艦隊はこれを攻撃して降参をすすめた。この
とき丁汝昌提督は部下を降参させ、自らは毒
を飲んで自決した。このニュースが日本に伝
えられると、多くの日本人は、敵ながらあつ
たばれな武人であるとしてこの死を惜しんだ。

樋口一葉はこのとき、日記にこう書いています。

「丁汝昌が自殺は、かたきなれどいとあわれなり、さばかりの豪傑をうしないけんとおもうに、うとまじきはたたかないなり」。敵ながらあつぱれという言葉や、そういう考え方は、昔の日本の合戦記のや講談などにはよく出てくる。足利尊氏は、自分の陣営にとび込んで来て玉砕した楠正成を、尊敬すべき立派な敵として、ねんごろにとむらった。殺した敵の霊をとむらうというのは、恨みを残して死んだ靈魂のたたりを恐れるという、日本人の伝統的な靈魂観から来ている考え方かと思われるが、のちにそれが、勇者を尊敬する武士道と結びついたのであろう。

日本の最後の国内戦であった西南戦争でも、官軍は敵將西郷隆盛を「古今未曾有の英雄」と認めながら戦ったし、西郷もまた政府の軍隊が立派に成長したことを喜んで死んで行ったというふうによく信じられている。

しかし、敵にも敬意を払うという考え方は、日本人同志の戦いが終わると急速に消えて行ったようである。日清戦争のこの丁汝昌の死を惜しんだエピソードがその最後だったのではないか。十年後の日露戦争では、日本軍は敵の捕虜を勇者として、かなり丁寧に扱うことを心掛けた。これは日本を野蛮国と思われないための国際世論に対する配慮があったためだが、明治初期に子供だった世代には未だ「敵ながらあつぱれ」という感覚も残っていたのかもしれない。

その後の戦争では、日本人はもう敵も人間であるという考えを失ったかのようだった。私は太平洋戦争中に少年だったが、敵の捕虜の姿を見て「おかわいそうに」と云った婦人が、非国民として非難された事件をよく覚えている。戦後の日本人がやるようになった遺骨収集は、日本人の靈魂観の独得の現れ方を示しているが、ときにはわれわれは、われわれが殺したかっの敵の霊にも祈るべきである。



志なかばに倒れた人々

志賀

戦国や幕末という動乱時代に活躍した英雄志士の中で、天寿をまとうとした者は少ない。それも功成り名遂げた後ならばまだ諦めもつこうが、志なかばにして非業の死を遂げたとあつては、その魂魄もなまなかなことでは成仏できない。

- 豊臣秀吉 病死
石田三成 刑死
小西行長 刑死
加藤清正 病死(毒殺?)
徳川家康 病死
佐久間象山 暗殺死
吉田松陰 刑死
高杉晋作 病死
坂本竜馬 暗殺死
近藤勇 刑死
井伊直弼 暗殺死
島津斉彬 病死
徳川慶喜 天寿
西郷隆盛 戦死(自刃)
同じ病死といつても、頼りになる後継者がいて幕府も安泰の徳川家康や、若死ながらも回天の偉業を果たした高杉晋作などは、まだ救われる。

「瀬田に武田の馬印を...」と遺言した信玄や、秀頼のことをくどくどと五大老五奉行に依頼しなければならなかった豊臣秀吉は、さぞ心残りであったと思われる。華々しく戦って屍を山野にさらすのは、武将にとっては必ずしも悲劇ではあるまい。が、部下の裏切りや、反対陣営の暗殺剣によって生命を絶たれた英雄には、「若し長生きしていれば...」の興味も期待も、ファンには大きいものがある。まして身は縛られ、刑吏の秋水一閃、首、胴ところをかえた石田三成、小西行長、吉田

松陰、近藤勇らの心のうちは、いかばかりであつたらう。英雄量の上での大往生は、望む方が無理かも知れない。



梅原旭濤温習会は大盛会

四月第一日曜日の六日午後〇時半より京都安井神社境内の金比羅宮会館にて、梅原旭濤会主催、京都琵琶協会後援の温習会が催された。

この日は最高気温が二十度まで昇り、桜花が一時にパツと咲き、なんとなく浮き浮きした気持ちになり、聴衆は十一時ごろより続々詰めかけ、開演時には会場一杯となりました。

定刻午後〇時半、平井春嶺京都琵琶協会長が開会の挨拶を述べて直ちに演奏に入り、梅原旭濤会長が番外に石重丸を演奏、やんやの喝采を浴びて降壇、続いて次ぎ次ぎとプログラム通りに全十五曲の演奏(別項参照)を終了。聴衆は各人の熱演名演に酔えるが如く、一曲の終る都度万雷の拍手は会場を押し、誠に大盛会であった。そして終演の挨拶を梅原平井両氏が述べ、併せて今後の御支援を懇請

この日午後三時ごろより低気圧の通過に伴い、突風と降雨のため折角開いた桜花が半ば散り、花の命の短かさを目近に見たことでした。

温習会終了後、関係者約三十名が一堂に会し祝賀の小宴を開いて大盛況を慶び合ひ、丁度降雨もやみ突風もおさまったので、七時過ぎそれぞれの家路に向ったが、ただプログラム中、病氣や突発事故のため三人の欠演があったのは残念でありました。(X・Y・Z生)

言(44)

石川五右衛門 遠州産。は郎と称した。河内の医師山口古庵に寄宿してから石川五右衛門と改名。徳川時代の大盗賊で名古屋城の金のしやちほこを盗み、石川や浜の真砂はつきるとも世に盗人の種はつきまじと歌ったという。また京都南禅寺の楼門に登って、春の眺めはうららかに価千金とは小せえ、小せえ...とうそぶいた。文禄元年、捕えられて釜ゆでの極刑に処せられたがその刑場への道すがら聖誉上人の徳に感泣したとして京都寺町四條の墓地に葬むられた。

筑前琵琶春の会

三月十六日(日)昼岡山市福祉センター労働会

館別館、主催岡山山組会(会長西川旭操女史)。寿三番叟1会員一同▼壇の浦1武木田旭昇。絃旭将▼小栗栖1三宅旭栄。絃旭孝▼青葉の笛1山田旭晃。絃旭操、旭光、旭鳳、旭孝。立方五人▼姫百合の塔1谷口旭孝。絃旭操▼新撰組1竜場旭鳳。絃旭操、旭晴▼天の羽衣1大西旭恵。宮口旭陽生、谷口旭孝。絃旭暢。旭晴、旭将。立方二人▼伽羅の兜1竹本旭将▼五條橋1高垣旭晴▼秋風故郷の山1高旗旭光。絃旭操、旭鳳、旭孝、旭陽生▼(以下来賓)大楠公1秋元旭晨▼那須与市1横野旭凰▼本能寺1木山旭山▼堅田落1坂田旭弘。

日本芸術琵琶會三月例会

三月十六日(日)昼一時東京文京区大塚六丁目貸席京屋。お江戸日本橋。門琵琶演奏1山崎錦幽▼利休の最期1坂入晴風▼俊寛(上)1鈴木好水▼俊寛(下)1日比錦姥▼吹雪の敵1奈佐喜八▼漢詩二題1金森旭弾▼桜狩1青木草水▼西郷隆盛1高田栄水▼実盛1若宮旭登▼舟弁慶1杉山旗水▼教盛1鈴木流泉。以上演奏のあと小宴、六時半散会した。

薩摩琵琶研修・悠絃会

三月三十日(日)昼東京中野区大和町の大地域センターに於いて山崎錦幽、八束一峰、坂本錦道の三氏が世話役となり発会第一回創立大会が開催され、門琵琶・伴流謡切連弾1錦幽、錦道▼菅公1八束一峰▼彰義隊1大富士岳鮮▼利休の最期1山崎錦幽▼月下1輕部岳